Qualia and idleness

成露　草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｑｕａｌｉａ　ａｎｄ　ｉｄｌｅｎｅｓｓ

【Ｎコード】

Ｎ５８５５Ｙ

【作者名】

成露　草

【あらすじ】

私、緋乃籠目は、勇者・魔王・チートなどと呼ばれる人達が集まって出来た世界に君臨する四人の王の一人、観測者をしている。淫魔族の宰相（鬼畜眼鏡）に仕事を急かされたり、過保護な従者（ヤンデレ気味）に世話をされながら、それなりに幸せな生活を送っている。父親の子供問題（百人超え）や魔王の八つ当たり（世界崩壊の危機）、国民同士のいざこざ（世界大戦）などの内輪の問題から、異世界トリップ、逆異世界トリップなどの外交問題（一日一人は召喚されます）に対処しながら、ペットの獣人（たまに襲われます）

を癒しに頑張って――え？　魔王が勇者として召喚された？　ああ・・・うん、ごめん。ちょっと問題が発生したからこれで失礼するけど、気にせずゆっくりしていってね。

プロローグ

【創造国書第一巻　第一章　著・観測者リズスガルド＝カッツェ】
抜粋

余り知られていない事実だがどんな世界にも必ず、勇者や魔王、チートなどと呼ばれる者は存在する。
その者達の事を“世界（メルティア）を超越する者”と呼ぶ事にしよう。
メルティアの存在する理由は様々だが、どんな理由であろうとメルティアと世界の関係には一つ共通点がある。
メルティアが世界にとって異端である、と言う事だ。
中には英雄、勇者などと世界に必要とされる者もいる。
しかしそれは必要な時に生まれることが出来た、ごく一部が得うる名だ。
大概の者は危険人物として末梢される。
だが簡単に殺されるようならばメルティアとは呼ばれない。
メルティア達は世界を敵に回しても生き残った。いや、正確には死ねなかった。
生き残り、生き残り、生き残り。
いつしか精神崩壊を起こすメルティアが現れ、世界を破壊し始めた頃。
メルティアの中でも更に異端である四人のメルティアが安寧に暮らす為の策を考えだした。
自分達を受け入れることの出来る世界がないならば、自分達で世界を創ればいいのだと。
その四人はメルティアの心が壊れることを防ぐ為に、新たに産まれ来るメルティアを幸せにする為に世界を創った。
そしてその四人は、聖帝・竜帝・魔王・観測者と呼ばれる王と成った。

【創造国書第八巻　第四章　著・観測者リズスガルド＝カッツェ】
抜粋
『征服する世界（コンクエストヴェールンス）』
これが向葵・第三期からのこの世界の名だ。
制圧的な名前だが、事実制圧的な行いをしているこの世界には似合いの名前だろう。
だがこの世界に反抗する者は誰一人としていない。
なぜなら、この真実に気付いているのはごくわずかな者達だけだからだ。
大部分の者達はこの世界の存在さえ知らない。知っている者達も神話のように考えているだろう。
気付かれないように征服しているのではない。
その力量の差から誰も気づくことが出来ないのだ。
違和感など一切なく、それが当然のことのように思えるほど自然に。
だからこそ気付いた者達は畏怖から『コンクエストヴェールンス』と呼び、ついにはこの名が正式名称と成ったのだ。

視点一　聖帝騎士の朝

早朝、隣人が飼っている鶏の鳴き声で、俺――緒方清二郎（オガタセイジロウ）――は目が覚めた。昨日飲みすぎたせいで頭が痛い。鶏の甲高い声は大いに俺の頭痛に貢献した。

「くそっ・・・薬、貰ってくるか」

この世界の酒は、薬の耐性が強い奴でも酔えるように出来ている為、それ専用の解毒薬でなければ二日酔いを治すことはできない。他世界の酒と比べると厄介な酒だが、解毒薬さえ飲めば酔いを覚ますこともできることから、俺は好んで飲んでいた。そして毎回薬をもらいに行くのだが。

朝食を作るのも億劫だったので、城の食堂で食えば良いかと――二日酔いの時は何時もこうだ――制服を着て部屋を出た。

朝日が眼に痛いほど輝く中、大通りはすでに人で賑わっていた。焼きたてのパンの匂いが漂ってきたと思えば、魚の生臭い匂いが鼻を突く。売り子の声は鶏の声ほどではないが俺の頭にダメージを与えた。朝市の客は、俺と同じ人間と昼型の獣人がほとんどだ。時々、エルフも眼の端に映る。

移転（テレポーテーション）で城まで行ってもいいが、なんとなくこの空気が好きで、途中防音魔法（サウンドシュルージョン）を自身に懸けはしたが、のんびりと登城した。

城は正方形の形をしていて、俺が必要としている薬と食堂があるのは西側に門がある観測者の領域だ。流石に、俺がいる聖帝の領域である南側の門からそこまで歩く気はないので移転で一気に飛んだ。

他世界からこの世界に来た俺にとって、門番がいないということは大いに俺を驚かせた。俺の故郷ではどの城だって、いや、金があれば貴族だって門番を置いていたからだ。

「だが、これはないだろう」

門番がいないことは、この国に住んですでに5年経つ俺を驚かせることはなかったが、門が無くなっていたことには驚かされた。こ

この城に外壁はないので城に直接ある門が破壊されて中が丸見えになっていた。通路に敷かれた真紅の絨毯が、大理石の破片と土で汚れている。敵襲……などと言うことはあり得ないので、恐らくどこかの馬鹿が馬鹿をやったのだろう。俺はひとつため息を吐くとその惨状を横目に中に入った。この程度のことで一々騒いではいけないということはこの世界では常識だ。これが何時起こったことかは知らないが、遅くとも今日の午後までには元通りになっているだろう。

中央階段を上がって少し行ったところに医務室がある。観測者はこの世界の他王よりも遥かに知識が深い。観測者は世界中の文化を記憶・管理することが仕事なので必然とそうなったのだ。よって、医療に関することはどの王の民など関係なく全て観測者の管轄となっている。

これを聞いたとき、門番有無以上の衝撃を受けたが、同じ城に集まって暮らしている所から、王同士の仲の良さが窺えるのでなんら問題はないのだろう。

「おはようございます」

医務室と書かれた看板が釣られた、細かい装飾が施された木製の扉を挨拶と共に開けた。ここの看護師は挨拶だけには厳しい。一度無言で扉を開けたことがあったが、治療が終わった後、一時間近く正座で説教をされた。

「あら、緒方さん。おはようございます。今日も二日酔いですか？」

ここの常任看護師であり、受付嬢のミリアンナが俺を見てそう言った。俺が朝、ここに来る時は二日酔いの時しかないため、そう言いながらすでに解毒薬を出している。

「ああ、貰って行く」

薬を受け取ろうと手を伸ばすと、薬に手が触れる前にミリアンナに手首を掴まれた。ミリアンナはかなりの美少女だ。身長は俺の肩辺りまでしかなく、柔らかそうな栗色の髪がふんわりと彼女の顔を覆っている。大きな亜麻色の瞳で甘く見つめられては男ならどんなお願いでも聞いてしまうだろう。

そんな彼女がどこから取り出したのか、櫛と真紅のリボンを片手に持って目をギラギラさせながら俺に声を低くして言った。
「その前にその頭をなんとかなさい？」
「・・・はい」
医務室の花、ミリアンナ。子供を八人も抱える母親である。一番上の息子に会ったことがあるが、どう見ても３０過ぎのオッサンだった。どんな猛者であろうとも彼女からすれば皆子供。渾名は“姐さん”である。

ミリアンナにつけられそうになったリボンを何とか拒否し、俺は黒ゴムで背中の中ほどまである黒に近いこげ茶色の髪をひとつに束ねた。
観測者は医療に関することは全て無料としている。薬代も掛からない。だが、ここを利用した奴は大体これぐらいでは？　という勘で料金を払っていく。俺も払った。なぜ無料なのにそんなことをするかと言うと、それはここの恐ろしいポイント制が関わっている。
俺がまだ、この世界に来て３か月ほど経った頃、その悲劇は訪れた。俺が１０回目の解毒薬を貰いにいった翌日、上司から医務室からのメッセージカードを受け取った。そこには「マンドラゴンの根・５００グラム、幡千華の茎・１キロ、一週間以内」と書かれていた。意味が分からず上司に聞くと、なんでも、医務室には使用ポイントというものがあり、それがたまるとこのようにお使いを頼まれるようになっているらしい。当時の俺は、まぁ、医療なんていう金のかかるものがお使い程度で済むなら軽いものだよな、とタカを括っていた。そして、書庫でそれがどこに生えている植物なのかを知らべ、このお使いの恐ろしさを知った。まず、これらの植物はこの世界に存在していなかった。どちらも異世界の物だ。しかも別々の。これは、まだ良い。探索（サーチ）を使えば大まかな絞り込みは可能だからだ。問題はこれらの植物が群生していないことと上級魔獣の住処にしかな

いところだった。あの後俺は、正確な数は覚えていないが、少なくとも３０回以上は超長距離移転（トリップ）を繰り返し、期限ぎりぎりにお使いを終えたのだった。

あのメッセージカードは発行されたら最後、拒否権はない。そのため、ポイントをためない為の唯一の方法である、勘による代金支払いをするのだ。代金がいくらなのかミリアンナや医者達は絶対に教えてくれないし、代金が少ないとポイントに加算されてしまうので何時もそれなりの額を払うようにしている。あの後から俺は一度もメッセージカードを貰ったことはないので足りないという事はないのだろうが、いくら無駄に払っているのか地味に気になるところだ。

上司曰く、絶対に出来ることしか頼まれないらしいが（子供の場合、普通に市場でお使いだそうだ）、これを考案したのが観測者だと知り、観測者は絶対に敵に回してはいけないと俺は思った。

医務室と同じ階にある大食堂を観測者は一般にも使用可能としている。ここの料理は、ありとあらゆる世界の物が出される。安くて旨いと言うことで常に大盛況だ。料理の内容は一週間ごとに一掃されるようになっていて、好評だったものは町のレストランにレシピを売り渡したり、本を出して利益を出している。

俺は、１０種類あるメニューの中から『パルパ鳥のサンドイッチ』を選んだ。昨日の昼に食べた『坦々麺』が旨かったので、また頼もうかとも思ったが、朝からは重すぎるのでやめた。

「セイ！　おはようさん」

俺がカウンターで料理が出てくるのを待っていると、同僚のクルド＝シャルイードが声をかけてきた。

「ああ、おはよう」

クルドは竜の獣人、竜人（ドラグーン）だ。金髪碧眼で甘いマスクを持っている

上に、竜人の特徴である温厚さと一途さから多くのファンがいる。夢見がちな女が見たら「王子様！」と叫ぶかもしれない。見た目が２０代後半なのに、口調が少々オヤジ臭いが、実年齢は１０００歳を軽く超えているらしいので仕方ないだろう。

「ん？　セイ、お前また二日酔いか？」

薬は水なしで飲めるものなので医務室を出て直ぐに飲んだが、鼻のいい竜人にはわずかに残る残り香で分かったらしい。からかうような声色なのに表情は爽やかな微笑にしか見えない。本人曰く、ニヒルに笑っているつもりらしい。クルドのおかげで美形にも出来ないことがあるのだと知った。

「ああ、飲みすぎた」

「たったあれっぽっちで二日酔いたぁ、お前は本当に酒に弱いな。ところで、何を注文したんだ？」

「クルドが強すぎるんだ。俺が弱いわけじゃない。パルパ鳥のサンドイッチだ」

俺が言い終わるのとほぼ同時に料理が出てきた。出てきた『パルパ鳥のサンドイッチ』は固めのパンに俺の掌ほどもある肉の塊が大量の野菜と共に挟まれているものだった。それも２個。

「・・・ひとつ食べないか？」

「セイは胃も弱いんだな」

いくらなんでもこの量は食べられないとクルドにひとつ進めると、ため息交じりにそう言い、ほんの３口でそれを食べきった。大口で食べているはずなのに優雅な食事風景に見えるのだから美形とはつくづく得な生き物だ。

その後、『パルパ鳥のサンドイッチ』を２個と『坦々麺』を３杯、『角煮定食』４セットを注文したクルドと共に朝食を済ませた。

朝食を食べ終わった後は、魔術を使えないクルドを一緒に移転させ、聖帝の領域にある俺たちの仕事場まで移動した。机の上には大

量の書類が山となって乗っている。俺もクルドも騎士なんていう職業に就いているが、週に1回か2回、聖帝が起こす問題に駆り出される以外はほとんど書類仕事だ。

思わず現実逃避のように窓の向こうに目をやると、青い空の中を巨鳥やグリフィン、ドラゴンが飛んでいるのが見えた。

小鳥などと言う可愛らしいものが一切いないが、いつも通りの平和な光景に何とも言えない充足感を覚え、手を動かし始めた。

視点二　観測者部下の戦い　前篇

魔王の領域は酷く閑散としているように感じられた。室温も陛下の領域よりも数度低いように思う。それは魔王の領域が城の北側にあるということもそうだが、それ以上に、領域全体に広がっている魔王の魔力の影響だろう。我らが陛下の包み込むような温かさがある魔力が恋しくなる。

こんな所に長居は無用と、移転（テレポーテーション）し、現在魔王がいる執務室に向かった。

魔王の執務室の扉は3メートル程のもので、色が黒い事と細工がないことを除けば、陛下の執務室の扉となんら変わったところは見られなかった。

中に、魔王とその宰相がいるのが魔力から分かる。2人も私の存在に気づいてはいるだろうが、特になにかする気配はない。取るに足らないことと思っているのだろう。

私は呼吸音さえも大きく響く静寂の中、小さく深呼吸をしながら、左手に抱えたバスケットを確認する。赤いシルクのリボンが可愛らしいバスケットに汚れはない。リボンの形も完璧だ。私は今度は大きく深呼吸すると、目の前の扉をノックするために右手を挙げた。

陛下の命を果たすために、いざ！　魔王戦へ！

観測者様の部下の朝は早い。陛下に忠誠を誓った私、セルディン＝シェル＝リードの朝も勿論早い。起床時間は朝日が昇る1時間から2時間前だ。陛下の起床時間はその日の気分次第でお代りになるが、就寝時間は太陽が沈む頃と大体決まっている。だから陛下につつがなく執務をしていただくために、陛下が御起床になる頃には必要書類を完成させなければならない。とは言っても前日に、翌日の必要書類は完成させてしまっているので、長期書類の方がメインだ

が。
　陛下は半身の影響で眠欲に特化されており、１日に最低でも１２時間はお休みになる。この世界では常識だが、王の方々は皆対になっていらっしゃるらしい。聖帝は竜帝と、我らが陛下は魔王と半身なのだそうだ。そこで出てくるのが、特化と欠如。それは、各々の性格にも大きな影響を及ぼしている。それが良いのか悪いのか、私には判断がつかない。だが、はっきり言ってそれは大した問題ではない。なぜなら陛下は素晴らしい方だからだ！　問題は身体的に表れる特化と欠如である。これは、半身の片方が三大欲求のどれかに特化すると反対はそれが欠如するというものだ。宰相閣下曰く、特化した方の半身に、欠如した方の半身の欲が流れて行ってしまっているのではないかとのことだ。
　つまり、陛下が１日の半分もの時間を睡眠に奪われてしまっているのは全て、陛下の半身である魔王が原因であると言うことなのだ！　魔王め！　許すまじ！　貴様の所為で私と陛下との接触時間が大幅に削られているのだ！　唯でさえ、多忙な陛下を私の様な下っ端が拝見するなどままならないことだというのに！　ああ、宰相閣下や従者殿が羨ましい！　宰相閣下は仕事で、従者殿は私生活で陛下に付きっきり！　それに対して私が陛下を拝見出来るのは、通路を移動する時の凛々しくもお美しいお姿と、庭でお昼寝をなさっている時の愛らしい寝が――ゴホンッゴホンッ！！
　ああ、らしくもなく興奮してしてしまった。ですが、それほど私、いえ、私達は陛下を愛し、尊敬しているである。
　そして、今日も今日とて、我らが陛下のために私が仕事に精を出していた時、なんと奇跡が起こったのだ。
　正午少し前、私は区切りのよい所まで仕事が終わり、食堂へと向かっていた。その時、なんと正面から陛下がこちらに向かって歩いてきているではないか！　しかも従者殿を連れず、お一人でである。あまりに珍しいことに驚きながらも、陛下を拝見出来た喜びに私の胸は震えた。私は緊張で震える手に力を込めながら、通路の端によ

り出来うる限り優雅に頭を下げた。陛下の足音は真紅の絨毯に吸い込まれまったく聞こえない。しかし、優しく香る金木犀の香りから、陛下が近づいてくるのが分かった。普段、陛下は私達が視界に入ると一言声を懸けてくださる。近くでお声を聞くことが出来るだろうかと期待に胸を振るわせていると、陛下の足が私の視界に映った。このように近くに陛下がいらっしゃることは初めての経験だ。心臓の音が頭に響く。頭が爆発しそうだ！

そんな私の耳に陛下の涼やかな声が優しく響いた。

「あなた、セルディンさんだよね。この後暇？」

「……は、はい！　とても暇です！」

一瞬陛下の声に聞き惚れ、返事が遅れてしまった！　しかも内容が変だ！　ああ、だがそれ以上に陛下が私の名前をご存じだったことが何ともいいがたいほどの喜びを私に与える。

私が羞恥と歓喜に、顔を真っ赤にしていると陛下は優しくおっしゃった。

――――お願いしたいことがあるの、と

着いてきて、と言う陛下のお言葉に従い、後に続くと、着いたのは陛下の私室であった。陛下は、どうぞ、と一言言うと部屋に入っていく。私もそれに慌てて続いた。

扉の作りは私が使っているものと大差なかったが、部屋の中は当然ながら私のものとは比べものにならない。広さは私のものの３倍は確実にあるし、何より調度品の質が違った。だが、今の私にはどんな優美な調度品もかすんで見えた。

陛下は部屋の右側に置かれていた長椅子に腰かけると私を見た。一瞬目が合ってしまい慌てて頭を下げる。

陛下の御気分を害してしまったのではないかと内心冷や冷やしながらも、この程度のことで謝罪しては陛下のことを狭量だと思っている、と感じられてしまうのではないかと考え頭を悩ませていると、

髪に優しく何かが触れた。
「ふふ、サラサラだね。気持ちがいい」
その声で、今私の髪に触れているのが陛下の手であると気付いた。考えなど頭から吹っ飛び、頭に感じる優しい感触と今まで嗅いだ事がないほど濃く香る香りに神経が集中する。
あまりの心地良さに緊張が解れ、うっとりとしだした頃、陛下は私の少々長い襟足を優しくすいた後、顔を包み込むように持ち、目が合うようにそっと持ちあげた。
流れるような動作に、陛下の美しい紅い瞳と漆黒の髪が目に映ってようやく私は自身の状況を把握した。湯気が出ているのではないかと言うほど顔が熱い。
陛下はそんな私を見て、3回、瞬きをした後、私の頬を親指の腹で撫で、微笑みながら、可愛いとおっしゃった。
そのお言葉と笑みに目が潤む。ああ、我が人生に一片の悔い無し！
私はあまりの感動に口元が緩んでいたらしい。そっと口に何か柔らかいものが押し込められた。
頭で考えるよりも先に体が、陛下から与えられた物だという判断を下し、咀嚼する。口に入れられた物はどうやらサンドイッチらしかった。瑞々しいトマトや柔らかい鶏肉の味が口に広がる。
「美味しい？」
口にはサンドイッチが入ったままなので、必死に首を上下させる。陛下が手ずから与えてくださる物が不味いなど、ありえない。それどころか、陛下の微笑みさえあればグゼル――灰汁の強い植物で、虫も食べない――でもお腹が一杯になるまで食べられそうだ。
「なら、よかった。実はお願いって言うのはそれについてなの」
「どういうことですか？」
出来ることならずっと味わっていたかったが、泣く泣くサンドイッチを飲み込み、陛下の言葉に答える。
「これをね、届けて欲しいのよ」
そう言って陛下が両手を前に出すと、そこに赤いシルクのリボン

が可愛らしいランチボックスが現れた。蓋が開けられており、中に数種類のサンドイッチが見える。そこには私が頂いた物と同じものもあった。

「はい。私などで宜しければ喜んで承ります。どちらに届ければ宜しいですか？」

私が承諾の返事をすると陛下は、ありがとう、と態々お礼までおっしゃり届け先を私に告げたのだった。

視点二　観測者部下の戦い　後編

「どうぞ、お入りください」
氷のように冷たい声が私のノックに答えた。
美声の部類に入る声のなのにも関わらず、嫌悪感を感じた。
「失礼いたします」
そう一言いい、私は扉を潜った。
敬語など魔王に対して使いたくなかったが、部下の教育がなっていないと、陛下が非難されては絶対に嫌なので、私は陛下の為に敬語を使った。
部屋の中は、扉から見て右側にクリーム色のソファーがあり、正面には書類が山と積まれた大きな机、左側には同じく書類が積まれた机、他に棚３つと扉２つがあった。
魔王は正面にある机で黙々と書類を片付けていた。書類の山の所為で姿を見ることは出来ないが、ペンを走らせる音が途切れることがないことからそれが分かった。宰相は左側にある机から動いてはいないが、一応立ち上がり私を見ているので顔が分かった。
宰相は銀色の髪と金を散らした紫色の瞳をしていた。
魔族は魔力の質量と並行して、美しさが決まる。宰相である彼は、魔族の中では上位のものであるので、当然ながら美形であった。３０代ほどに見えるインテリ系の美男子である。
だが、私の心は１ミリも揺らぐことはない。私の心を震わせることが出来るのは、陛下唯お一人であるからだ！
私は臆することなく、陛下から与えられた要件を告げた。
「観測者様から、魔王様にお昼のお弁当をお持ちしました」
“観測者様”と私が言った時点でペンの音がぴたりと止まったが、それは私が話し終えても変わらなかった。宰相もそのことに気付いた様で、無言で書類の積まれた机の側を見ている。
一瞬、部屋に静寂が訪れたが、カタリという、恐らくペンを置い

たのであろう音と共に魔王が書類の山から姿を現した。
その姿を見た瞬間、私は思わず目を見開いた。
魔王は魔族の頂点に立っているだけあって、ものすごい美形であった。宰相が霞んで見える。更に、これがフェロモン、と言うのだろうか？　色香が半端ではない。５メートルは離れた位置にいるし、目が合ったわけでもないのに、背中をゾクゾクとしたものが走った。
だが、陛下に全てを捧げたこの私が、その程度のことで驚くことはない！　私が驚いたのは、魔王の色が陛下とまったく同じだったからだ。髪の色、瞳の色、肌の色と、全ての色が同じなのである。その所為か、魔王を見て思わず陛下を連想してしまった。
しかし、私はすぐにその考えを否定した。
陛下は愛らしくも凛々しい少女（宰相閣下曰く、１７歳で成長――いや、老化というべきか？――が止まったそうだ）である。雰囲気も柔らかく温かい。そばにいる者すべてに安心感を与えてくれる。
対して魔王は、大人の色香が漂う男だ。しかも、危機感（命ではなく貞操の）を与える雰囲気がある。安心感など、色々な意味で感じることは不可能だ。
ああ、早く陛下の領域に帰りたい。こちらに来て５分も経っていないはずなのに私はすでに陛下の温かみが懐かしくて仕方がなかった。陛下のことを考えてしまったので余計にそう思う。
「籠目（カゴメ）はどうした」
軽いホームシックになっていた私の耳に魔王の美声が入り込んだ。低く響く声には威厳が感じられたが、同時にゾワリとしたものを感じ、全身に鳥肌が立つ。
魔王が言った籠目とは陛下がごく親しい者に呼ばせる渾名である。本名はブラット＝イブラゼル＝ファントムハイヴ様と仰る。ついでに言うと、魔王の名前はダーク＝リデル＝アルセンフォードだ。
「陛下に致しましては、只今外出中でございます」
その美声に身を固まらせた私だが、根性で、至って坦々と話した。
魔王は私の言葉を聞いて、眉をピクリと動かすと、一瞬の間を置

いて姿が消した。そして、それと同時に手にあった重さが消える。どうやらバスケットも一緒に持って行ったらしい。
魔王は恐らく陛下のもとへ行ったのだろう。魔王と陛下は半身と言うこともあり、親友（間違っても恋人ではない。従者殿も否定していた）である。あんな男と一緒にいて平気だとは、流石陛下！私も見習わなくては！
取りあえず、これで陛下の命は遂行したことになる。完了を報告しに行く時の、報告方法で悩んでいたのだが、魔王がバスケットを持っているのを見れば明白だろう。
肩の力が抜け、小さくため息を零す。
魔王の存在もそうだが、陛下からの初めての命令で、私はかなり緊張していたらしかった。
「まったく、まだ仕事は終わっていないのですが」
……すっかり宰相の存在を忘れていた。宰相は決して存在感が薄いわけではない。寧ろ濃い。町ですれ違えばほぼ全員が振りかえるだろう美貌もそうだが、氷の様な雰囲気が何よりも存在を主張している。
宰相閣下も氷の様な雰囲気を持っているが、この人ほどではない。まぁ、宰相閣下は種族が淫魔族と言うこともあって、魔王ほどではないが色香の方が気になる。
「で、あなたは何時までいるつもりですか？」
確かに用事が終わったにも関わらず、執務室と言う重要書類が集まる場にいるのは迷惑だろうが、その言い方はいかがなものだろうか？
思わず眉間に力が入ったが、ここで怒ってはあまりにも子供である。
私は、ここにきて初めての笑みを浮かべると、優雅にお辞儀をし、部屋を辞した。
「申し訳ありません。あまりに存在感がありませんでしたので、宰相様のことをすっかり忘れていました」

私はまだ１８歳。怒鳴り散らすほど子供ではないが、怒りを完全に我慢できるほど大人ではないのである。同僚に短気だと揶揄されることもあるが、それは同僚の気のせいだ。
扉の隙間から、驚いた宰相の顔が見れたので、今回のことはこれで許してやろう。
私は、人生最大の仕事を終えた達成感を感じながら、移転して部屋に向かったのであった。
今回の報酬に陛下から頂いた、陛下特製のサンドイッチを頂くために。

この時、私は浮かれ過ぎて失念していた。
観測者である陛下の仕事は、世界中の文化などを保持・記憶することである。そして陛下の部下である私達にとって情報収集は十八番。この世界で起こったこと、しかも陛下のことで私達が知らないことなど何一つない。同僚や、ましてや上司が私と陛下が接触したことに気づかないなどと言うことはあるはずがなかった。
折角、陛下から頂いたサンドイッチは、希望者（全体の３分の１）でじゃんけんをし、勝利した１５名（サンドイッチが１５個だった）が食べることとなった。希望者は皆、１０代から２０代（見た目であって実年齢は不明だ）の若者だ。残りの３分の２の大人達は、微笑ましそうにこの騒ぎを見守っている。
私はすでに１つ、しかも陛下から手ずから頂いていると言うことで不参加となった。
初めは、なぜ私が頂いたものをやらねばならんのだ！　と憤慨したが、上司や同僚の心底羨ましそうな視線を受け、怒りは急激に萎んだ。彼らの気持ちは十分すぎるほどに理解できる。
宰相閣下が、あまりの騒ぎにいぶかしみ作業室に来たが、今の彼らの脳に宰相閣下に構うほどのスペースはない。宰相閣下は、この騒ぎを温かく見ていた部下に騒ぎの原因を聞き、彼らに馬鹿にする

ような視線を投げかけていた。
仕事中はずっと陛下のお傍にいることが出来る閣下には理解できないのも無理はない。
宰相閣下の冷たい視線と、外野の温かい視線の中、彼らの聖戦の火ぶたは切られた。

後日、この騒ぎを聞いた陛下の提案により、一度に１０人ずつ、陛下と共に昼食を取ることとなった。
私達が狂喜乱舞し、陛下への尊敬を更に深めたことは言うまでもないだろう。

視点二　観測者部下の戦い　後編（後書き）

書き終わって、気がつきました。
セルディンの性別が男とも女とも取れそうなしゃべりになっている！？
面白いので性別は、秘密と言うことにしておきます。メインでそのうち分かってしまうと思いますが。
あと、部下達の籠目への愛は、尊敬であって、恋愛感情はありません。純粋な敬愛です。見守っていた部下達も勿論籠目を敬愛していますが、長く籠目に仕えているので（見た目は２０代から５０代までと幅広いですが、実年齢はもっといっています）、彼らよりも籠目の性格を把握していて、結果が分かっていたので参加しなかっただけです。

この話はメインの話よりも先のことなので、メインではセルディンは１０歳前後になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5855y/

Qualia and idleness

2011年11月21日20時56分発行